

ヘミングウェイを繰り返すデイビッド・ボーン

『エデンの園』におけるモチーフの繰り返し

森田 司

はじめに

『エデンの園』は、ヘミングウェイの没後 25 年にあたる 1986 年にトム・ジェンクスの編集により出版された。ヘミングウェイがこの作品に着手した時期には諸説あるが、遅くとも 1947 年から書き始められ、執筆を断念した 1959 年までに書き上げられた原稿は 1,500 ページ以上に及ぶ。今日出版されているバージョンが 247 ページから成ることを考えると、かなりの量のテキストが原稿から削除されていることがわかる。その中にはシェルドン夫妻とアンドルーの三角関係のプロットの削除も含まれており、編集者への批判の一因となっている。しかし、ここで注目したいのは、上記のものに限らず削除されたテキストの中には、ヘミングウェイがコントロールできなくなってしまったと思われる (Burwell 99) と指摘されるほどの膨大な繰り返しが見られることである。本発表では、作品内で繰り返されるモチーフに注目し、書くことを制御できなくなったヘミングウェイが同じく書けなくなった作家であるデイビッドに自分自身を投影していることを論じる。

キャサリンを繰り返すマリータ

出版されたバージョンの最終章において、デイビッドはアイデンティティや作家としての能力を取り戻しつつあり、彼の明るい未来を感じさせながら物語は終了する。しかしながら、ヘミングウェイは作品の執筆中に予め暫定的な結末として 2 つの「仮の最終章」を書いており、どちらにおいても破滅的な結末が用意されている。どちらの「仮の最終章」も採用していない出版されたバージョンにおいても、破滅的な結末の予兆はモチーフの繰り返しという形で作品内に残されたままになっている。

ボーン夫妻の新婚旅行の最中、ある日妻のキャサリンは夫のデイビッドにベッドでの性役割の交換を提案し、デイビッドはそれを受け入れる。さらにキャサリンは髪型や肌の色など、2 人の姿をそっくりに変えることも提案する。これらの変化に即して、キャサリンは小説家のデイビッドが「発明型」、変化をもたらす自身を「破壊型」と称する。キャサリンに破壊的な提案を持ち掛けられ、それを受け入れるたびにデイビッドは自身のアイデンティティに不安を抱くようになる。

その後、ボーン夫妻がマリータと出会い奇妙な三角関係が形成されると、デイビッドはキャサリンとの新婚旅行紀の執筆を中断する。キャサリンはこれに不服で、デイビッドやマリータとの仲が悪化し疎遠になるのだが、彼女が再び 2 人の前に姿を現すと、キャサリンには多くの繰り返しが見られるようになる。彼女はデイビッドと車を手に入れる以前のように自転車に乗るようになり、また、作品冒頭でデイビッドと揃えていたボーダーシャツを再び着ているのである。このように過去を繰り返しているキャサリンは、さらに、デイビッドと再び髪型をブロードで揃えることも提案する。それまではキャサリンの提案を受け入れていたデイビッドだが、今回はこれを拒否する。しかし、キャサリンが「自分のためにしなくてもマリータのためだったらするかどうか聞いてみるとマリータが言っていた」(177)と発言すると、文章のブランクによって場面が飛ばされ、デイビッドは既に髪を染め終えて後悔しているのである。これら一連の流れは、デイビッドに提案を受け入れさせる力がキャサリンからマリータに移り変わったことを示している。これに前後するように、これまでキャサリンがもたらしていた変化をマリータが望む、あるいは、それらの変化を実際にもたらすようになっており、マリータがキャサリンと同質のものになろうとしていることがわかる。2 つ目の「仮の最終章」において、このことはより顕著であり、マリータはデイビッドと彼をコントロールする自身のことを競走馬と調教師に喩えている。

どちらの「仮の最終章」においてもデイビッドは自身の能力を失う人物として描かれており、彼の破滅は作中の繰り返しに示唆されている。出版されたバージョンにおいて、デイビッドはマリータの献身によって作家としての自信を取り戻すように描かれているが、繰り返しをもたらす存在がキャサリンからマリータへ転じているという点に注目すると、デイビッドの破滅が避けられないものであると考えられる。

書くことの繰り返し

デイビッドに旅行紀の執筆を再開してもらいたいキャサリンは彼の短編作品の原稿を燃やしてしまう。デイビッドは繰り返し書くことが不可能だとマリータに説くが、彼女の説得により 2 つ目の「仮の最終章」におい

でも、出版されたバージョンにおいても、デイビッドは最終的に原稿を書き直す。原稿を燃やしてしまうキャサリンの行為は、結果的にはデイビッドに再び短編を書かせることにつながり、マリータは彼を励ますことでもう一度短編を書かせることに成功している。マリータはキャサリンが元々持っていた「デイビッドに繰り返させる役割」を引き継いでいると考えられる。

焼かれた原稿の中には、幼少期のデイビッドのアフリカでの体験をもとにした短編が含まれている。執筆中、デイビッドは父親を理解できないために、起こった出来事だけを書くようにしていると独白している。しかし、原稿焼失後に物語を書き直す最中に語られるデイビッドの胸中は、初めて書いていた時とは全く異なり、代わりに父親がこれまでにないほど身近な存在になったことをデイビッドは実感する。このデイビッドの心境の差から分かることは、初めて原稿を書く際には、デイビッドは直接過去に立ち返っていたのに対して、再び書く際には既に書かれたこと、つまり一旦過去から切り離されて現在に近づいた事柄を書いている点である。言い換えるならば、最初に物語を書くとき、デイビッドは幼少期の自身の視点まで立ち返って物語を書いていたのに対して、書き直す際には、今では年齢がほとんど変わらないであろう彼の父親の視点から描くようになっていたのである。『エデンの園』において、キャサリンや原稿から削除された登場人物など、過去ではなく現在の出来事を形に残そうとする者にヘミングウェイが破滅的な運命を背負わせていることが指摘されている(フェアバンクス 115-119)。直接過去に立ち返らずに原稿の書き直しを行うデイビッドにもまた、悲惨な運命が待ち構えていると考えられる。

デイビッドとヘミングウェイの書く行為を照らし合わせると、ヘミングウェイは『エデンの園』中断と同じ時期にエッセイや回想録など複数の作品も断念し、自殺を試みるようになる。この頃のことを、ヘミングウェイの友人であるティリー・アーノルドは、彼は思い出すことができなくなり、生きる意志を失った(Nuffer 59)と語っている。書くことをコントロールできなくなってしまったヘミングウェイは、同じく過去を遡って書くことができなくなった作家であるデイビッドに自身を投影していたのだと考えられる。

おわりに

本発表では、削除された『エデンの園』の原稿の中には編集への批判の要因となっている部分だけでなく、大量の繰り返しも含まれていることを指摘し、書けなくなった作家が描かれていることを論じた。

作品途中で登場するマリータはキャサリンの持っていた「デイビッドに繰り返させる役割」を引き継いでおり、出版されたバージョンの明るい結末とは裏腹にデイビッドは破滅的な結末を回避できないことが考えられる。さらに、過去を遡り書くという作家としての能力を失ったデイビッドの姿を明らかにし、思い出すことができなくなったために、同じく作家としての能力を失いつつあったヘミングウェイ本人の姿がデイビッドに投影されていることを示した。

ヘミングウェイが『エデンの園』において、デイビッドを通して書くことができない自分自身を描いたことは、なによりもこの作品が完成されなかったという事実を示されている。

参考文献

- Burwell, Rose Marie. *The Postwar Years and the Posthumous Novels*. Cambridge UP, 1996.
- del Gizzo, Suzanne and Frederic J. Svoboda, editors. *Hemingway's The Garden of Eden: Twenty-Five Years of Criticism*. The Kent State UP, 2012.
- Fleming, Robert E. "The Ending of Hemingway's Garden of Eden." del Gizzo and Svoboda. pp.33-41.
- Hemingway, Ernest. *The Garden of Eden*. Scribner, 2003.
- . *A Moveable Feast*. Restored Edition. Penguin, 2009.
- Lays, Peter L. *Fifty Years of Hemingway Criticism*. The Scarecrow Press, 2014.
- Leonard, John. "The Garden of Eden: A Question of Dates." del Gizzo and Svoboda. pp.58-74.
- Nuffer, David. *The Best Friend I Ever Had*. Xlibris, 2008.
- Spilka, Mark. *Hemingway's Quarrel with Androgyny*. University of Nebraska Press, 1990.
- フェアバンクス香織『ヘミングウェイの遺作——自伝の希求と＜編纂＞されたテキスト』勉誠出版、2015年。